

国内の畜産物の需給動向

牛肉

7年1月の牛肉生産量、前年同月並み

生産量

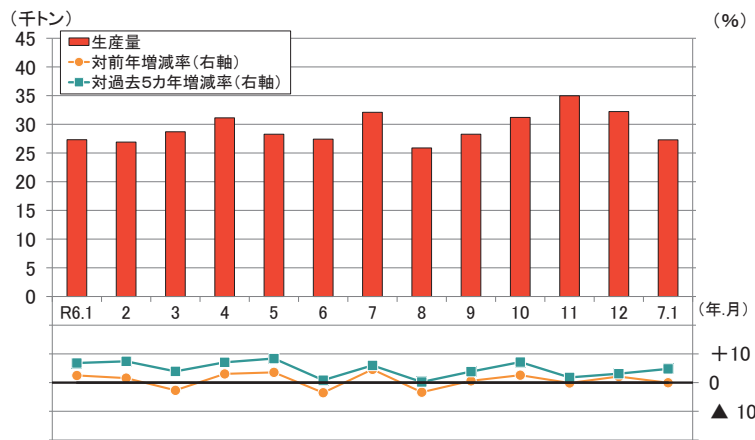
令和7年1月の牛肉生産量^(注1)は、2万7305トン（前年同月比0.0%減）と前年同月並みとなった（図1）。品種別では、和牛は1万3695トン（同5.2%増）とやや、交雑種は7465トン（同2.2%増）とわずかに、

いずれも前年同月を上回った一方、乳用種は6098トン（同9.4%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較では、4.8%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

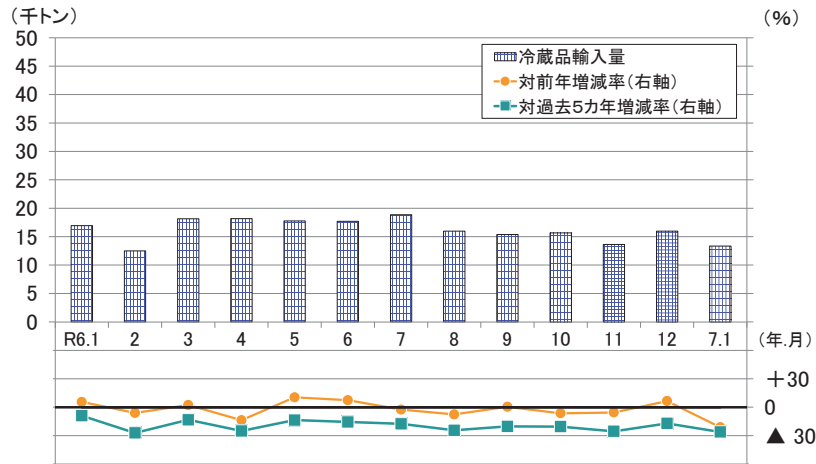
1月の輸入量について、冷蔵品は、円安や現地価格の高止まりの影響などにより、主要輸入先の豪州産および米国産輸入量が減少したことなどから、1万3357トン（前年同月比21.2%減）と前年同月を大幅に下回った（図2）。冷凍品は、輸入品在庫量が高水準であることなどにより、主要国を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなど

から、1万9176トン（同27.0%減）と前年同月を大幅に下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、3万2541トン（同24.8%減）と前年同月を大幅に下回った。

なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は26.1%減、冷凍品は22.9%減と、ともに大幅に下回る結果となった。

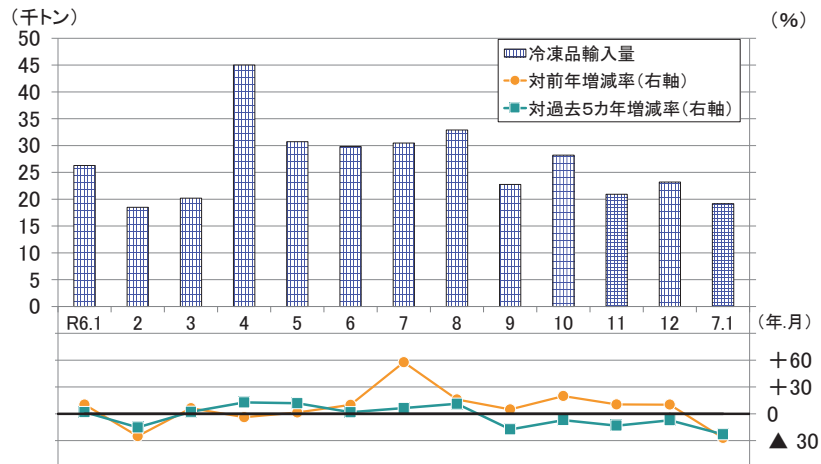
（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

1月の牛肉の家計消費量(全国1人当たり)は151グラム(前年同月比3.4%減)と前年同月をやや下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、14.2%減とかなり大きく下回る結果となった。

1月の外食産業全体の売上高は、12月に続き、年末年始の長期連休で、活発な国内移動や単月で過去最高を更新した訪日外客数

などにより堅調だったことから、前年同月比7.7%増と前年同月をかなりの程度上回った(一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」)。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、年始需要や各種キャンペーンにより好調で、同5.1%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、値引きキャンペーンが集客に貢献し、同13.1%増と前年同月をかなり大きく上回った。

ファミリーレストランの焼き肉は、客数は減少したものの、年始の好調と価格改定による客単価の上昇などで、同2.0%増と前年同月をわずかに上回った。

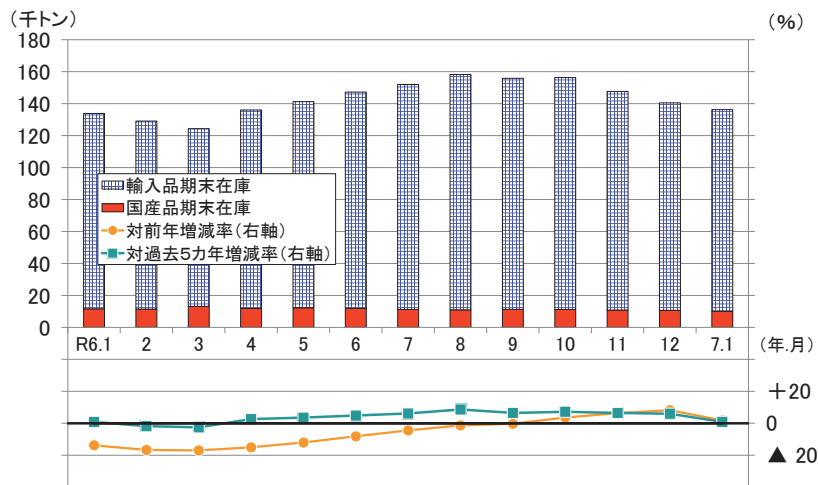
推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、13万6231トン（前年同月比1.8%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は1万131トン（同12.8%減）と前年同月を

かなり大きく下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は12万6100トン（同3.2%増）と前年同月をやや上回った。

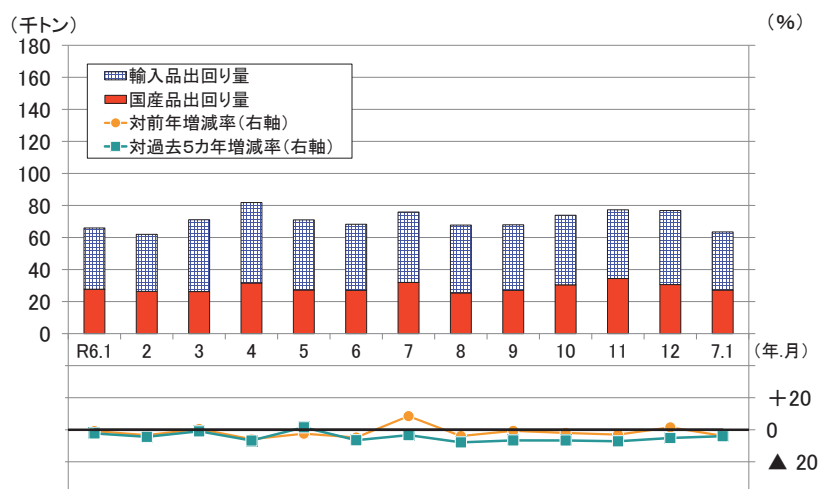
推定出回り量は、6万3473トン（同3.7%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は2万7231トン（同1.7%減）とわずかに、輸入品は3万6242トン（同5.2%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

豚 肉

7年1月の豚肉生産量、前年同月比0.5%減

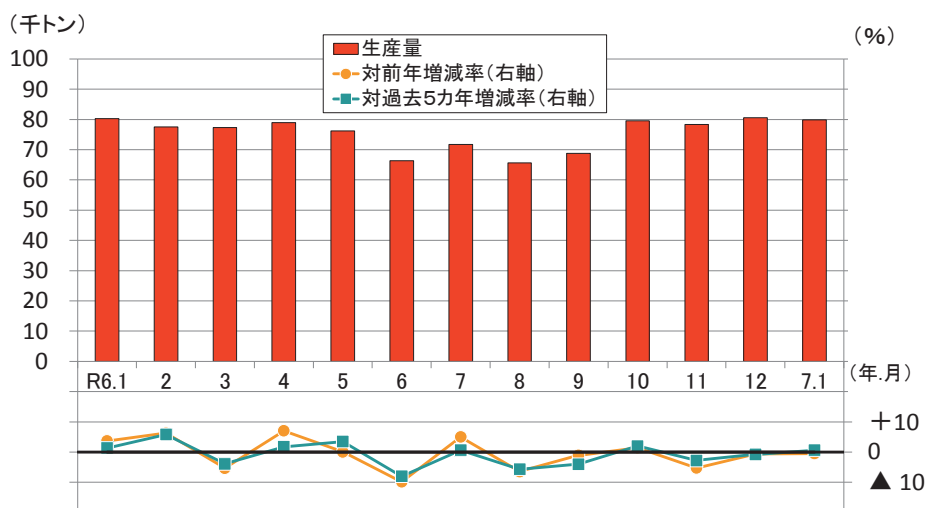
生産量

令和7年1月の豚肉生産量は、7万9908トン（前年同月比0.5%減）と前年同月を

わずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較では、0.7%増とわずかに上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

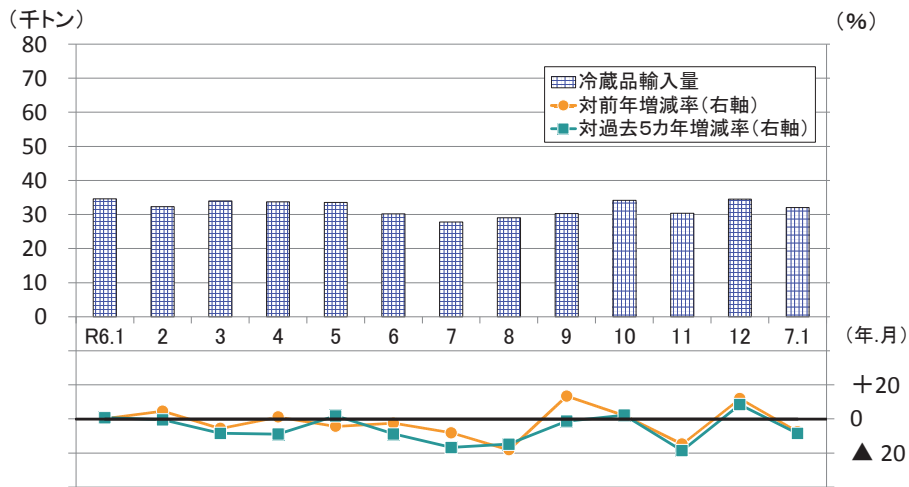
1月の輸入量について、冷蔵品は、円安や現地相場高の影響などにより米国産輸入量が減少したことなどから、3万2055トン（前年同月比7.5%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。冷凍品は、価格優位性のあるブラジル産輸入量が増加したことや、高騰していた現地相場が軟化したことによりスペイン産輸入量が増加したことなどから、

4万8441トン（同29.6%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注)では、8万505トン（同11.8%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は8.5%減とかなりの程度下回った一方、冷凍品は25.4%増と大幅に上回る結果となった。

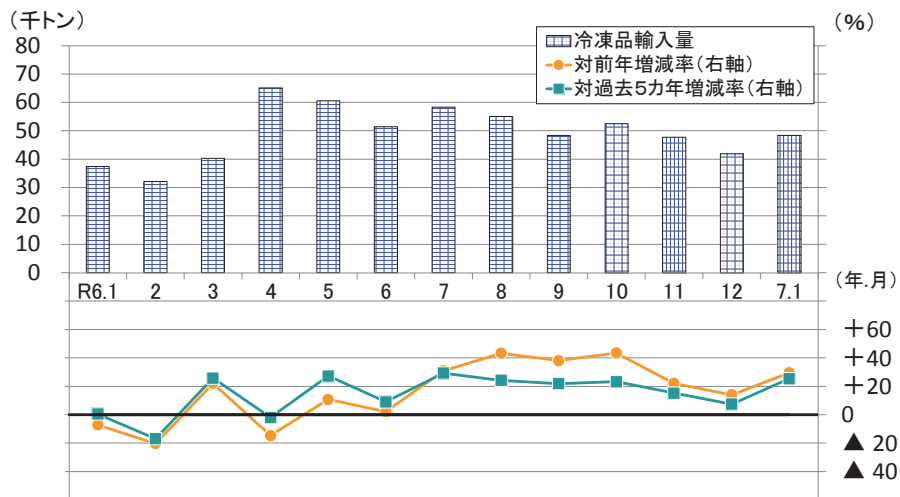
(注) 輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

1月の豚肉の家計消費量(全国1人当たり)は、621グラム(前年同月比1.5%減)と前年同月をわずかに下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、2.9%減とわずかに下回る結果となった。

推定期末在庫・推定出回り量

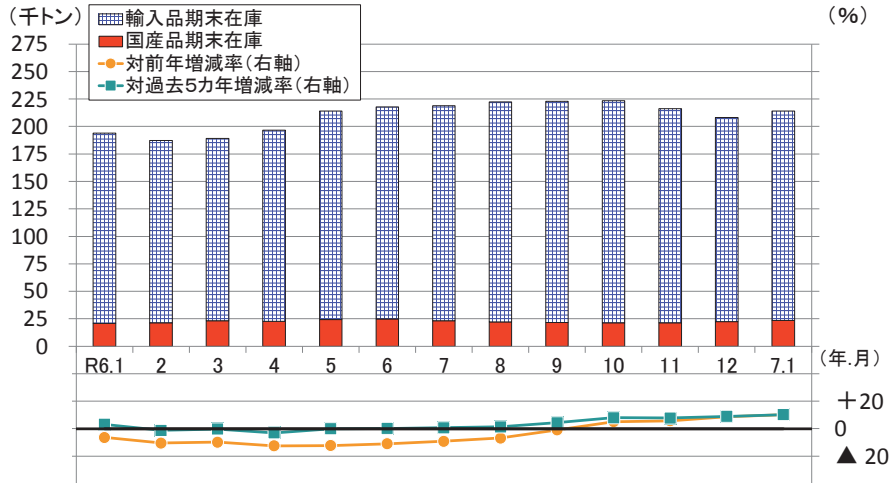
1月の推定期末在庫は、21万4044トン(前年同月比10.3%増)と前年同月をかなりの程度上回った(図4)。このうち、輸入品は、19万508トン(同10.0%増)と前年同月をかなりの程度上回った。

推定出回り量は、15万4479トン(同3.2%増)と前年同月をやや上回った(図5)。

このうち、国産品は7万8746トン（同2.5%減）と前年同月をわずかに下回った

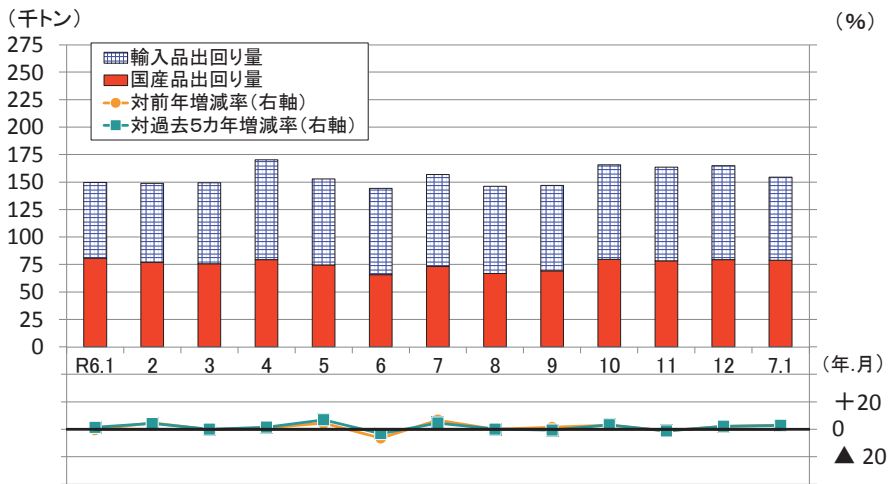
一方、輸入品は7万5733トン（同9.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏肉

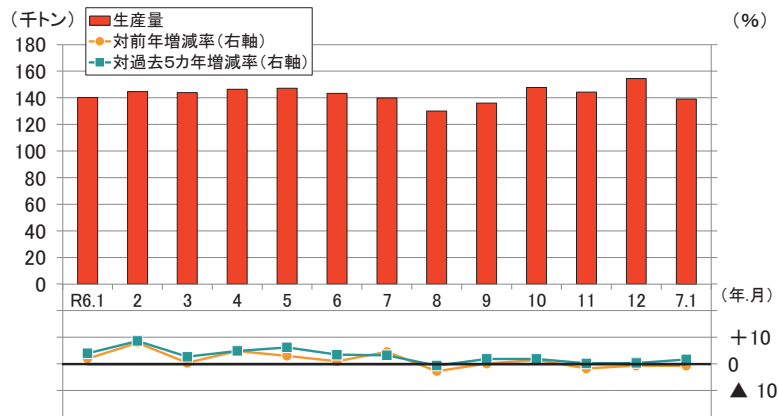
7年1月の鶏肉生産量、前年同月比0.7%減

生産量

令和7年1月の鶏肉生産量は、13万9100トン（前年同月比0.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の1月の平均生産量との比較では、1.8%増とわずかに上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

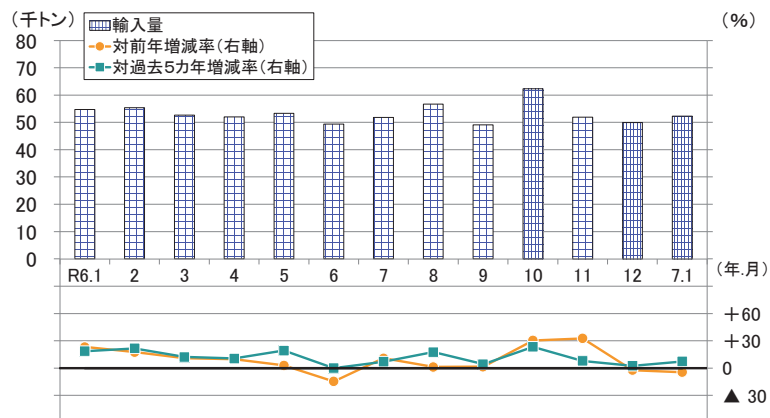
輸入量

1月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした鶏肉需要により安定的に推移する中、前年同月のブラジル産輸入量が多かったことな

どから、5万2300トン（前年同月比4.4%減）と前年同月をやや下回った（図2）。

なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較では、7.4%増とかなりの程度上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

1月の鶏肉の家計消費量(全国1人当たり)は、543グラム(前年同月比4.5%増)と前年同月をやや上回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、5.8%増とやや上回る結果となった。

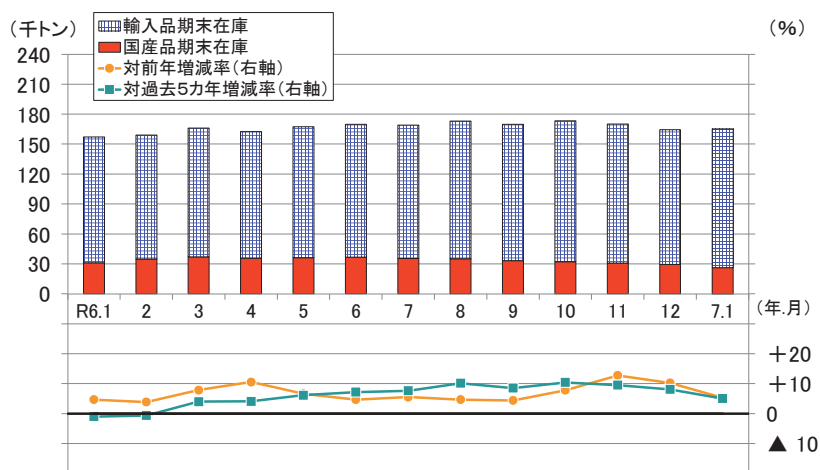
推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、16万5412トン

(前年同月比5.3%増)と前年同月をやや上回った(図3)。このうち、輸入品は13万9154トン(同10.5%増)と前年同月をかなりの程度上回った。

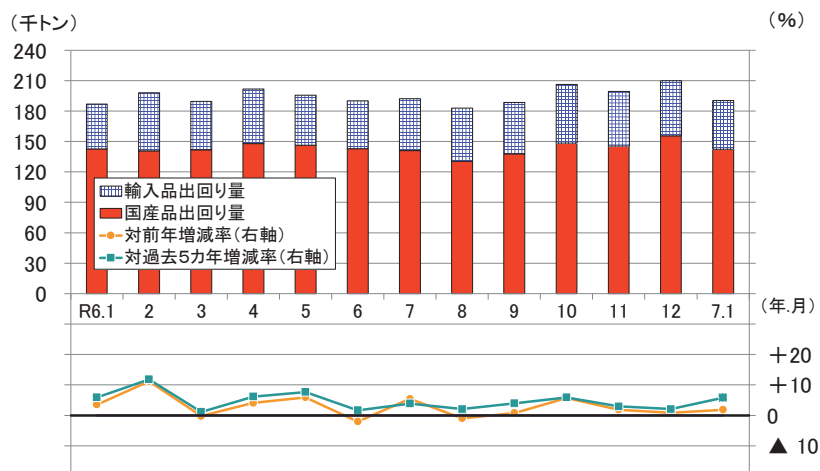
推定出回り量は、19万493トン(同1.9%増)と前年同月をわずかに上回った(図4)。このうち、国産品は14万2407トン(同0.1%減)と前年同月並み、輸入品は4万8086トン(同8.1%増)と前年同月をかなりの程度上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 大西 未来)

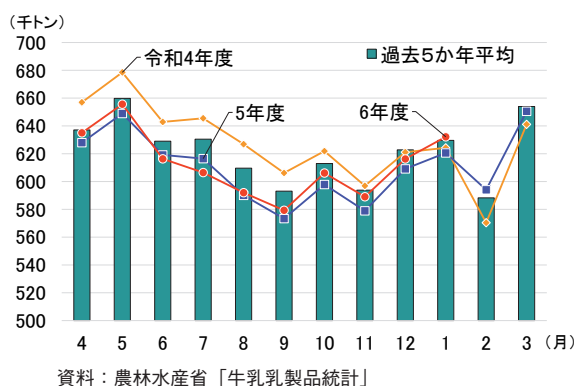
牛乳・乳製品

1月の全国の生乳生産量、6カ月連続で前年同月を上回る

北海道の生乳生産量、前年同月比3.9%増

令和7年1月の生乳生産量は、63万2176トン（前年同月比1.9%増）と6カ月連続で前年同月を上回った（図1）。地域別では、北海道が36万5489トン（同3.9%増）となり、6カ月連続で上回った。一方、都府県では、26万6687トン（同0.8%減）と7カ月連続で下回った。

図1 生乳生産量の推移



1月の生乳処理量を見ても、牛乳等向けは31万1047トン（同0.4%増）と、4カ月連続で前年同月を上回った。このうち、業務用向けについては2万3237トン（同0.6%減）と2カ月連続で前年同月を下回った。

乳製品向けは31万7586トン（同3.6%増）とやや上回り、6カ月連続で増加した。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万9694トン（同2.1%増）と5カ月ぶりに上回り、チーズ向けは3万8650トン（同1.4%減）と3カ月ぶりに下回った。一方、脱脂粉乳・バター等向けは、17万3663トン

（同4.9%増）と前年同月をやや上回り、6カ月連続での増加となった（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の牛乳生産量、5カ月連続で前年同月を上回る

1月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、25万454キロリットル（前年同月比0.3%増）と5カ月連続で前年同月を上回った。一方、成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万7144キロリットル（同4.9%減）とやや下回った。加工乳については、1万3063キロリットル（同6.8%増）とかなりの程度上回った。また、はっ酵乳は8万8376キロリットル（同12.5%増）とかなり大きく上回った。はっ酵乳は今年度に入って以降、6月を除いて前年同月を上回って推移しているが、冬季のインフルエンザなどの感染症の流行により、免疫機能への注目が高まったことでヨーグルトの消費が後押しされたなどと業界では推測されている。

1月のバター在庫量、前年同月比13.3%増

1月のバターの生産量は、7441トン（前年同月比7.2%増）と前年同月からかなりの程度増加し、6カ月連続で前年同月を上回った（図2）。出回り量は4910トン（同15.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った（農畜産業振興機構調べ）。1月末の在庫量についても、2万5693トン（同13.3%増）となり、5カ月連続で前年同月を上回った（図3）。

図2 バターの生産量の推移

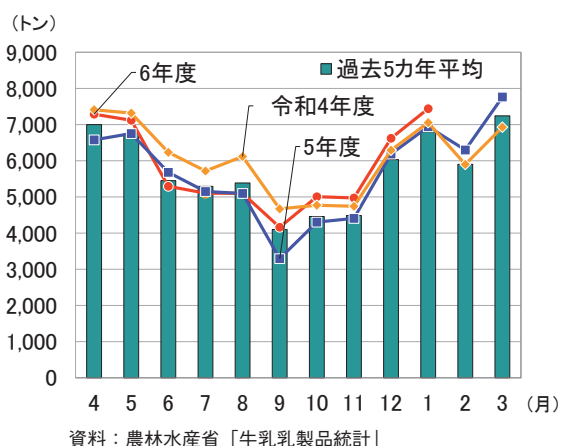


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

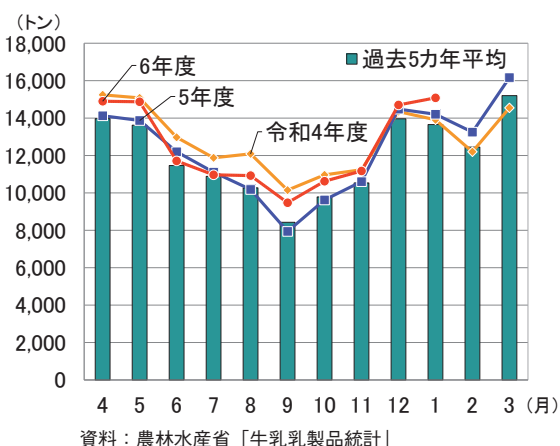


図3 バターの在庫量の推移

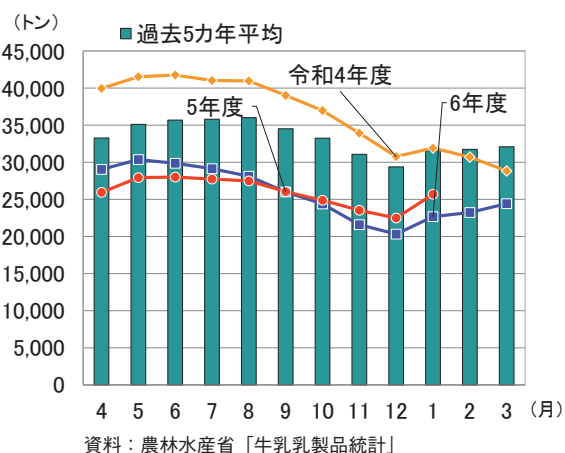
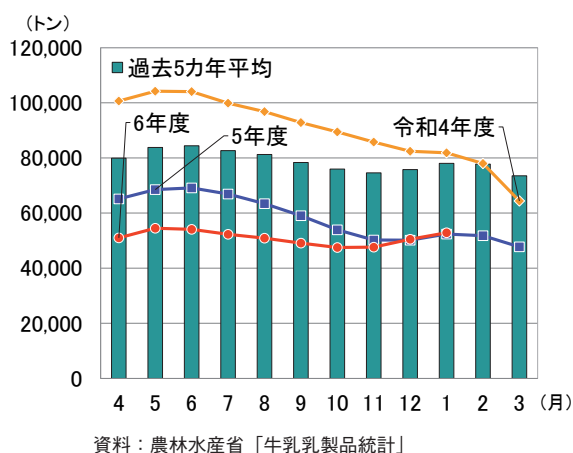


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



1月の脱脂粉乳生産量、前年同月比6.2%増

1月の脱脂粉乳の生産量は、1万5084トン（前年同月比6.2%増）と前年同月からかなりの程度増加し、6カ月連続で上回った（図4）。一方、出回り量は1万2729トン（同4.6%増）と7カ月ぶりに上回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量は、在庫低減対策の効果もあり、令和4年10月以降前年同月減で推移していたが、1月末は5万2854トン（同0.9%増）と、前月に続き前年同月を上回った（図5）。

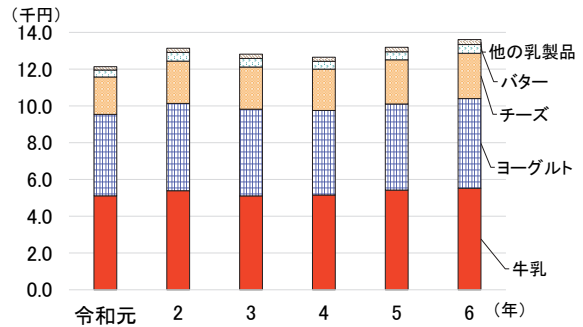
令和6年1人当たり牛乳・乳製品支出金額、2年連続で前年を上回る

総務省が令和7年2月に公表した家計調査によると、6年（1～12月）の全国1人当たりの牛乳・乳製品の支出金額は1万3915円（前年比3.2%増）と2年連続で前年を上回った（図6）。これは、原材料費やエネルギー価格の高騰、円安などの影響による製品価格の値上げなどが要因と考えられる。

内訳を見ると、牛乳が5524円（同1.9%増）、ヨーグルトが4876円（同4.1%増）、チーズが2464円（同2.6%増）と前年を上回り、

バターは474円（同8.6%増）とかなりの程度上回った。

図6 牛乳・乳製品の支出金額（全国1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査」

注1：1世帯（2人以上の世帯）当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。

注2：消費税を含む

注3：贈答用など自家消費以外のものを含む。

（酪農乳業部 山下 侑真）

鶏卵

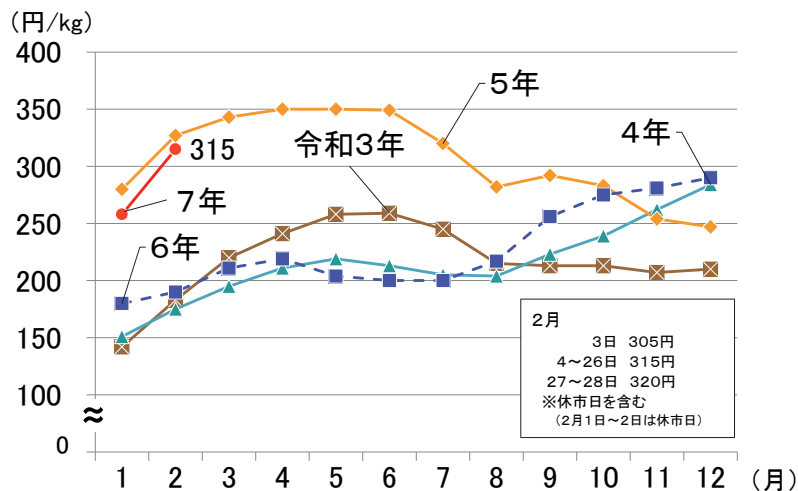
7年2月の鶏卵卸売価格、前年同月比65.8%高

卸売価格

令和7年2月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり315円（前年同月差125円高、前年同月比65.8%高）と、

前月から同57円上昇し、前年同月の同価格を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、月初の同305円から4日には同315円、27日には同320円と計2回の上昇があり、月間の上昇幅は同15円となった。

図 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」

注：消費税を含まない。

なお、過去5カ年の2月の平均卸売価格との比較でも、48.6%高と大幅に上回る結果となった。

供給面を見ると、生産量は、6年10月以降、全国各地の養鶏場（採卵鶏）で相次いで発生している高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の影響により、不安定な状況が続いている。一方、需要面を見ると、量販の一部において店頭価格の引き上げによる不振が見られたものの、HPAIの影響による供給不安から、業務用向けも含めて引き合いが強い状況にある。

家計消費量

1月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）は、897グラム（前年同月比0.1%減）と前年同月並みとなった（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較では、0.4%減とわずかに下回る結果となった。

（畜産振興部 大西 未来）

令和6年の牛および豚枝肉の格付結果

公益社団法人日本食肉格付協会は、令和6年（1～12月）の「牛枝肉格付結果（種別・性別）」および「豚枝肉格付結果」（令和7年2月5日版）を公表した。

牛枝肉の格付実施率は、成牛のと畜頭数（110万9600頭）に対して85.0%と前年から0.7ポイント増加となった一方、豚枝肉の格付実施率は、と畜頭数（1626万5364頭）に対して76.5%と前年から0.6ポイント減少した。以下、畜種ごとの格付結果を紹介する。

【牛肉】「A-5」の格付頭数は5年連続で15等級の中で最多に

令和6年の牛のと畜頭数は111万5113頭と前年比で1.0%増加した。品種別に見ると、和牛は54万2318頭（前年比7.0%増）、乳用牛は30万6239頭（同4.3%減）、交雑牛は25万5631頭（同2.0%減）、外国種などを含むその他の牛は5412頭（同50.1%減）となった。

このような中、同年の牛枝肉の総格付頭数は、同年の成牛のと畜頭数が増加（同1.0%増）したことなどから、94万2866頭（同1.8%増）と前年をわずかに上回った。品種別の格付頭数を見ると、「和牛」は同7.3%増（52万3027頭）と前年を上回った一方、「交雑牛」は同1.7%減（24万1130頭）、「乳用牛」は同4.8%減（17万3733頭）、外国種などを含む「その他の牛」は同53.5%減（4976頭）と前年を下回った。

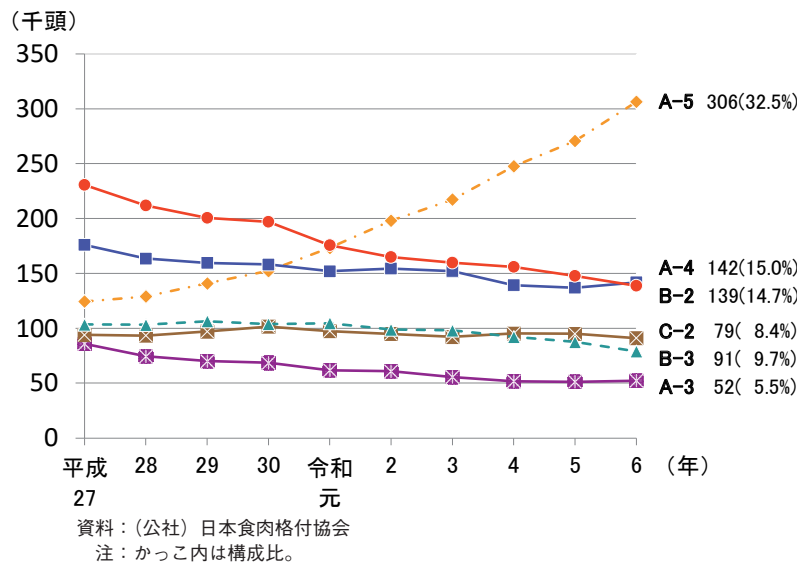
牛肉は、「歩留等級（A～C）」と「肉質等級（5～1）」を組み合わせた15段階で格付されている。歩留等級とは、枝肉から得られる部分肉の割合を評価し、部分肉歩留が標準より良いものはA、標準のものはB、標準より劣るものはCと判定される。また、肉質等級とは、（1）脂肪交雑（サシ）（2）肉の色沢（3）肉の締まりおよびきめ（4）脂肪の色沢と質一の4項目を5段階で評価し、四つの項目中、最も低い等級が肉質等級として

判定される。

6年の全体における等級ごとの格付頭数の推移を見ると、「A-5」が30万6478頭（同13.2%増）と前年をかなり大きく上回り、5年連続で15等級の中で最多となった（図1）。全体に占める割合は、32.5%となり、前年から3.3ポイント増加した。「A-5」の内訳を見ると、和牛去勢が60.9%、和牛めすが37.6%と、和牛で約98.5%となっている。

「A-4」は、14万1833頭（同3.5%増）と前年をやや上回り、「A-5」に次いで多く、全体の15.0%を占めた。なお、5年まで「A-5」に次いで多かった「B-2」は、近年減少傾向が続いており、6年は、13万8815頭（同6.1%減）と前年をかなりの程度下回り、全体の14.7%を占めた。「B-2」のうち約4割を乳用牛去勢が占めており、乳用牛のと畜頭数の減少が「B-2」の格付頭数の減少の主な要因の一つとなっている。

図1 主要な等級別格付頭数の推移



6年の歩留等級別の格付構成比を平成27年と比較すると、全体に占める「A等級」の割合は55.2%と、11.0ポイント増加した（図2）。また、肉質等級別の格付構成比を見ると、

全体に占める「5等級」の割合は33.0%と27年から19.4ポイント増加した一方、「4等級」は20.3%と同1.9ポイント減少した（図3）。

図2 歩留等級別の格付構成比

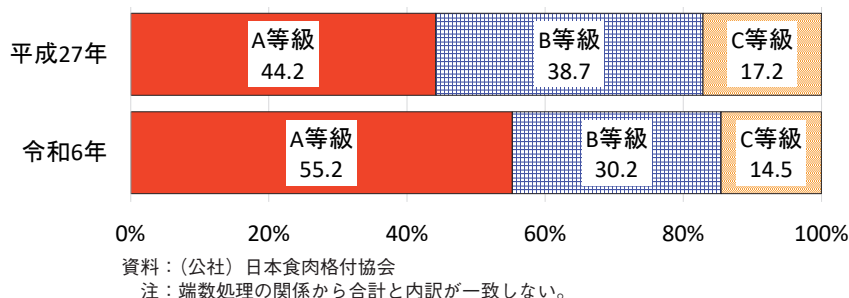
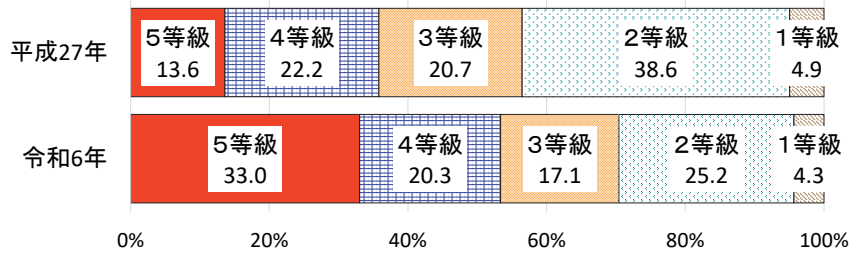


図3 肉質等級別の格付構成比



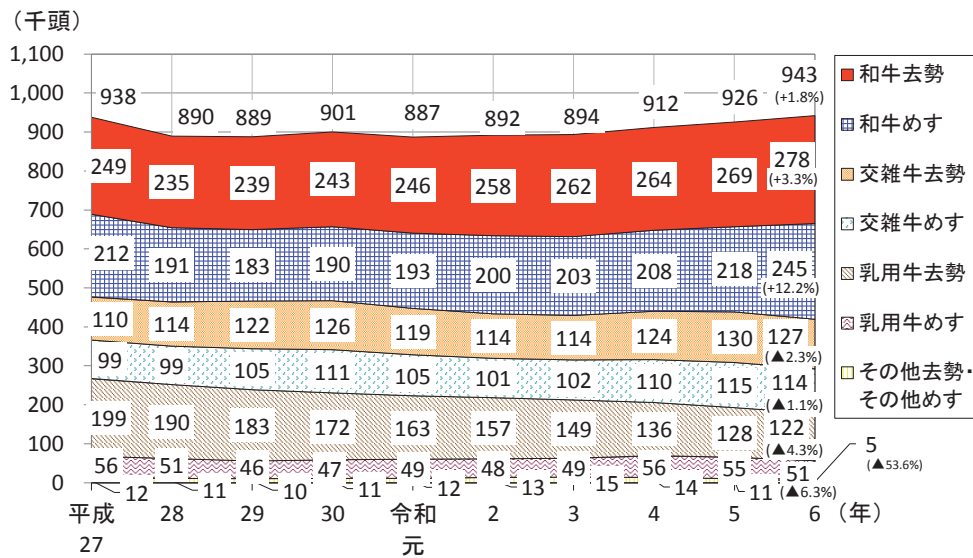
資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から合計と内訳が一致しない。

令和6年の品種別・性別の格付頭数を見ると、和牛去勢が27万7571頭（前年比3.3%増）と最も多く、次いで和牛めすが24万5247頭（同12.2%増）、交雑牛去勢が12万7194頭（同2.3%減）、乳牛去勢が12万2153頭（同4.3%減）、交雑牛めすが11万

3908頭（同1.1%減）となった（図4）。

なお、品種別の割合は、和牛が55.5%（同2.9ポイント増）、交雑牛が25.6%（同0.9ポイント減）、乳用牛が18.4%（同1.3ポイント減）、その他の牛が0.5%（同0.7ポイント減）となった。

図4 品種別・性別格付頭数の推移

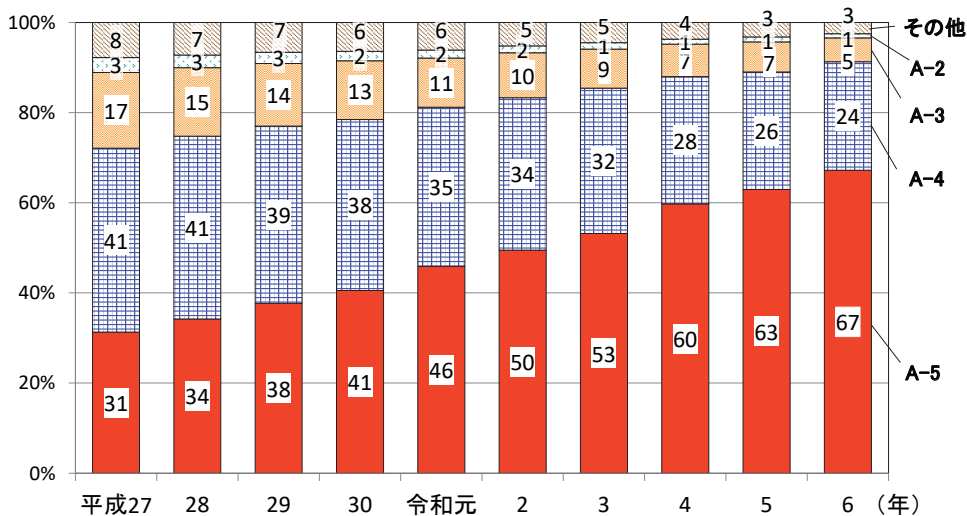


資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：かっこ内は前年比。

6年の品種別・性別ごとの格付構成割合を見ると、和牛去勢は、「A-5」が67.2%と、前年から4.2ポイント増加した一方、「A-4」は24.1%と同2.0ポイント、「A-3」

は5.3%と同1.4ポイントそれぞれ減少した（図5）。なお、和牛去勢全体に占める「A等級」の割合は、97.5%（同0.7ポイント増）となった。

図5 牛枝肉格付構成割合の推移（和牛去勢）



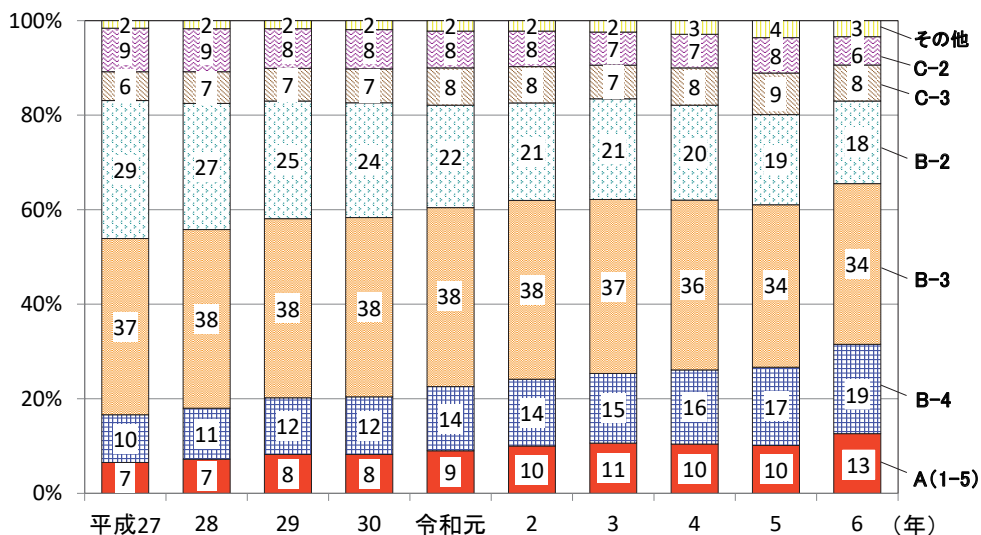
資料：(公社) 日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

交雑牛去勢は、「B-3」が最も多く、34.0%と同0.4ポイント減少した（図6）。次いで多い「B-4」は18.9%と同2.3ポイント

増加した一方、3番目に多い「B-2」は17.5%と同1.6ポイント減少した。なお、上位三つで全体の70.4%を占める。

図6 牛枝肉格付構成割合の推移（交雑牛去勢）



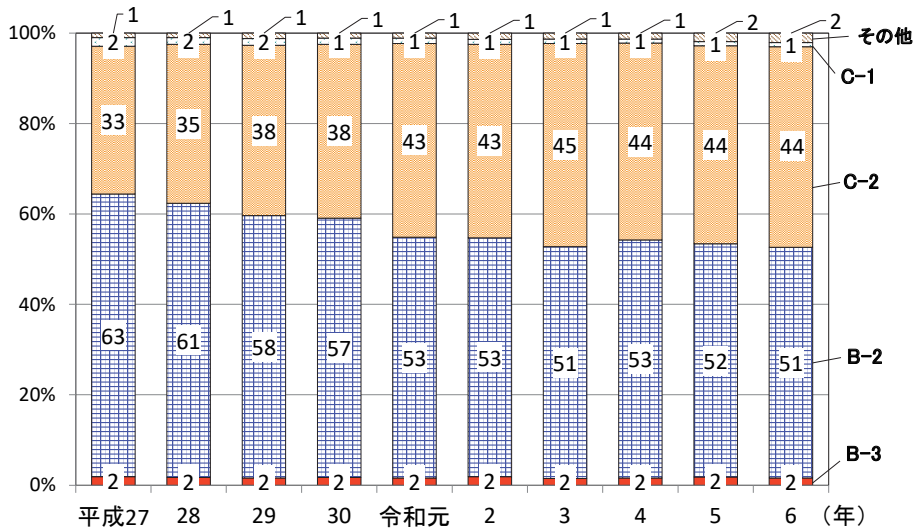
資料：(公社) 日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

乳用牛去勢は、「B-2」が最も多く、50.9%と同0.7ポイント減少した一方、次いで多い「C-2」は44.3%と同0.5ポイント

増加した（図7）。なお、上位二つで全体の95.2%を占める。

図7 牛枝肉格付構成割合の推移（乳用牛去勢）



資料：（公社）日本食肉格付協会

注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

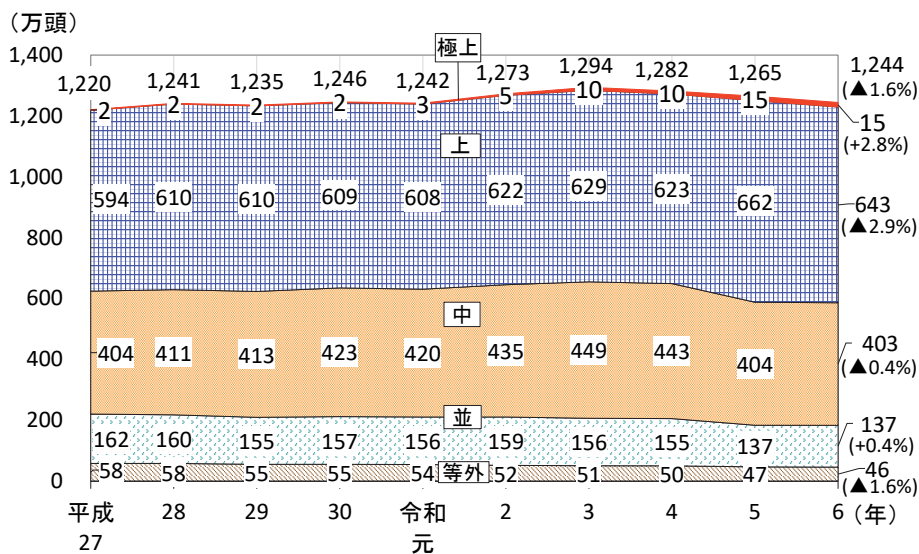
【豚肉】6年の格付構成比、「上」が51.7%、「中」が32.3%

豚肉は、枝肉の重量および背脂肪の厚さ、外観（均称、肉づき、脂肪付着、仕上げ）、肉質（肉の締まりおよびきめ、肉の色沢、脂肪の色沢と質、脂肪の沈着）の基準に照らして、「極上」「上」「中」「並」「等外」の

5等級に格付される。なお、令和5年1月より26年ぶりに改正された豚枝肉取引規格が適用されている^(注)。

6年の豚枝肉の総格付頭数は、1244万541頭（前年比1.6%減）と前年をわずかに下回った(図8)。等級別の格付頭数を見ると、「上」が643万103頭（同2.9%減）と最も多く、次いで「中」が402万5245頭（同

図8 豚枝肉等級別格付頭数の推移



資料：（公社）日本食肉格付協会

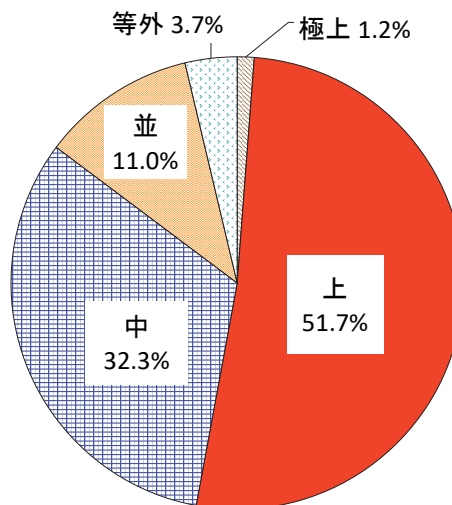
注：カッコ内は前年比。

0.4%減)、「並」が137万4313頭(同0.4%増)、「等外」が46万979頭(同1.6%減)、「極上」は14万9901頭(同2.8%増)となった。

(注) 豚枝肉取引規格の改正については「畜産の情報」2023年9月号「豚肉取引規格の改正と新たな情報提供サービスについて」(https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002896.html)をご参照ください。

6年の等級別の格付構成比を見ると、「上」が51.7%(同0.7ポイント減)と最も多く、次いで「中」が32.3%(同0.3ポイント増)、「並」が11.0%(同0.2ポイント増)、「等外」が3.7%(同0.0ポイント減)、「極上」が1.2%(同0.0ポイント増)となった(図9)。

図9 等級別の格付構成比



資料：(公社) 日本食肉格付協会
注：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない。

(畜産振興部 小森 香穂)